

同棲相手は機械娼婦

セクサロイド

めぎ



同棲相手は機械娼婦

めぐ

現在より暫く先の未来。

高度な人工知能の発展により生まれた疑似人格付与型のアンドロイド。当初は反発する声もあったが世界的な人口減少は否応なくその社会進出を後押ししていく。

政策により生産されたアンドロイドたちの中には性産業に従事するものも少なくはない。

性病感染の心配もない彼女たちは、人間の女性に代わる新たな労働力として社会に定着していった。

これはその中の一体のアンドロイドと、彼女と出会った男の物語。

金曜深夜の住宅街、疲れた足取りで帰路を急ぐ男が一人。

例年よりも早く訪れた冬の空気に息が白く曇る。

人気のない歩道を歩きながらひとつ、小さなあくびが漏らす。

若々しい年齢、まづまづの容姿ではあったが眼鏡の奥の眠そうな目と乱れた髪が魅力を損なっていた

彼の名は久保 涼。

中堅のロボットメーカーの技術者である。

ようやく一区切りついた仕事、作業用の新型ロボットの設計を思い返し
ながら、久々にまともに休める土日に思いを馳せる。

そんな彼の足がびたり、と止まる。

視界の隅、街灯に照らし出された視界の隅に奇妙なものを見つけたから
だ。

電柱の影から伸びる白い足。

見間違いかと幾度か瞬きをし、近づき覗き込む。

そこには染めたようなピンク色の髪にメッシュを入れたショートカット
と、この寒空の下では応えるであろうノースリーブシャツとホットパンツ
に身を包んだ女性が倒れていた。

「え、と……大丈夫、ですか？」

その姿に異様なものを感じながらも声を掛けるが反応はない。

恐る恐る覗き込むが身じろぎひとつしていないように思える。

まさか、死体なのかと見がすくむが、女性の首筋の印を見れば緊張が解ける。

「アンドロイド……？」

刻まれた QR コードと製造番号。それは彼女が人間ではなく造られた工業製品であることを示していた。



とりあえず目の前のものが死体ではないことに安堵の息をつくが、眉をひそめる涼。

恐らく彼女は人格付与型のアンドロイドであろう。

それが機能停止して転がっているとあれば、何かの事件に巻き込まれた可能性もある。

「これは、警察かなあ……」

携帯を取り出し、緊急連絡の文字をタップする。

警察への説明や徴収で貴重な休みの時間が削られることを懸念しながらも通話をアイコンをたっぷしようとした時。

びくり、とアンドロイドの体が震える。

ぎょっとして携帯を取り落とした涼に、アンドロイドは震えながら顔を向けこわばった表情で口を開く。

「……お、ネがい、警察、は……い、や……や、め……て……」

涼の「警察」という言葉に反応したのか、完全に機能停止をしていなかったらしい彼女はぎこちない動きで宙をもがくように涼に手を伸ばす。

無表情だった顔に僅かな表情、懇願するような暗い影が差す。

「わ、わかった、とりあえず落ち着いて……」

その必死な様子にたじろぎながらも手を差し出し彼女の体を抱え、その目にわずかに安堵したような光が浮かんだ次の瞬間。

きゅい、と彼女の頭部から小さな音が響き、同時に首がガクリと横を向く。

完全に機能停止したアンドロイドの重みに耐えかね、涼は彼女を地面に横たえながら途方に暮れていた。

気温の低さを忘れるほど汗だくになりながら涼はようやく自宅であるマンションの一室に「彼女」を運び込む。

寝室のベッドに横たえようと思ったが、人間よりも明らかに重量のある彼女を、明日の筋肉痛が心配になる状態の腕で持ち上げることは叶わず床にそのまま投げ出してしまう。

息を落ち着かせ、コップ一杯の水を飲み干しながら改めて「彼女」を見下ろす。

ピンク色の髪は人間であれば染めたものでしかありえないが、アンドロイドであればウィッグのような扱いの交換可能部品。奇抜ではあるがおかしなものではない。

だが、それ以上に目立つのはしなやかな肢体にメリハリのある、という表

現では控えめに過ぎるボディライン。

端的に言ってしまうえば扇情的と言えるほどの容姿。

大きめに開いたネックから覗く谷間に目のやりどころに困ってしまう。

「ともかく……再起動しないとどうにもならないな」

機能停止前の行動からして、彼女が人格付与型のアンドロイドであることは間違いないだろう。

所有者がいるものか、独自の生活を送っているものかはわからないが、いずれにせよ機能停止中のアンドロイドを勝手に連れ込んだとなれば後々問題になる。

再起動して自分の足で帰っていただくのが一番だ。

大きくため息をつき、厄介事を抱え込んだことを軽く後悔しながら彼女の首筋、最初に目に入ったQRコードヘタプレットのカメラを向けて呼び込ませる。

画面に表示されたリンクをタップすれば「彼女」のサポートページが表示されていく。

「ええと、カワシマ重工製業務用アンドロイド、リリースT2型、か」

カワシマ重工といえば涼の務める中小メーカーとは比べるすべもない、ロボット業界で一、二を争う大企業。

中でもアンドロイドのデザイン、性能は評価が高い。

そのままページ下部のメニューからマニュアルを呼び出しざっと目を通し、制御アプリもダウンロードする。

無骨な金属カバーに覆われた「ロボット」の整備や組立は日常茶飯事ではあるが「アンドロイド」の整備は知識こそあるものの直に行うことは初めての経験。

ましてや相手が扇状的な容姿であれば、否が応にも涼の鼓動は早くなっていく。

うなじの上側、印字されたQRコードの近くのマーキングが示す位置を押し込めば防水、防塵機能を持ったカバーが開いてコネクタがむき出しになる。

タブレットから伸びたケーブルをゆっくりと差し込めば、制御アプリの表示が変わってリンクが確立されたことを示す。

深呼吸してから表示されたアイコンをタップすると彼女の後頭部からかちゃ、と小さな音が響いて。

続いて頭頂部から首筋に一本、大きな線が現れたかと思えば頭蓋のパネルが左右に開いていく。

涼の眼前に晒される彼女の内部。

外気にさらされた頭蓋の中に覗く電子部品は限られたスペースに整然と詰め込まれている。

機能停止状態にも関わらず、いくつか瞬いている LED に照らし出された構造をしばらく見つめていた涼の口から言葉が漏れる。

「きれい、だな」

思わずつぶやくほどに、彼女は美しかった。

彼女の本体と言って良い人格モジュールと記憶ユニット、思考能力を司る演算ユニット。

頭蓋の中の基盤と配線は無秩序に見えるが、その全てが精妙に噛み合っ
てひとつの形を作り出している。

人工物故の無機質さと、美術品のような美しさを併せ持ったアンドロイド。

恍惚とも取れる表情で機器を眺めていた涼だったが、気を取り直すと目視で各機器のチェックを進めていく。

彼女は初めて見る機種であったが共通規格で造られている工業製品。仮にも技術者である涼にとっては理解可能な構造である。

「電子頭脳系統は大丈夫っぽいけど……だとしたら他が故障してるのかな？
単純にバッテリー切れとかならいいんだけど」

電子頭脳に異常がある状態での起動は最悪、人格モジュールの破損に繋がる。

そうなってしまえば大事だ。

だが、この状態なら起動を試してみてもいいだろう。

涼はタブレットの画面を操作し、最初の画面に大きく表示された起動アイコンをタップする。

すると数秒の後、頭蓋の中の回路が明滅を始め小さな唸りを上げ始める。

無機物に命が吹き込まれる、その様に思える様に涼は目を見張る。

『ぴ、きゅ。業務用アンドロイド、リリス T2 シリーズ KFA-A51WS:登録番号:FA512 = SW2531。人格エミュレートモードで起動を行います……エラー。電源ユニットに異常が生じています。電源ユニットの交換を行ってください。エラーコード AE401115。シャットダウンを行います……』

流麗な、だが感情のこもらぬ声で呟いたのち、一旦開かれた瞳が力なく閉じられる。

起動の失敗に小さくため息を付く涼。

予想の範疇ではあったが損傷部位は電源ユニット。

なにか無茶な動作でもして故障したのだろうか。

涼はマニュアルを再び開き詳細ページをめくり、電源ユニットの位置の記載ページを探していく。

「やっぱ、ここだよな……」

目当てのページに記された電源ユニットの位置は腹部ハッチ内部。

交換自体は難しい作業ではない、加えて都合の良いことに持ち帰り作業のために使用できそうな共通規格の電源ユニットも自宅にストックしていた。

だが。

僅かに浮かび上がる分割線や各部の小さなマーキングに気が付かなければ人間そのものの姿。

普段扱っているロボットの電源ユニット交換とはわけが違う。

「で、でも……しかた、ない。よな……」

誰かに言い訳するような言葉をつぶやくと、涼は。

恋人の一人もいたことはない彼に、女性の服を脱がせた経験など無い。

冷たい人造皮膚の感覚に息を粗くしながらシャツを下ろしていく。

胸元がはだけ、服が乳房の下に達した時。

「……う！」

小さくうめいて涼は目をそらす。

その下からこぼれ落ちたのはむき出しの大きな乳房。

そう、彼女は下着も身につけていない状態であった。

「えっと、これ、は……いいのかな……」

仰向けに横たえられた女性型のアンドロイド。

重力に逆らい、完璧な形を保っている乳房。

完璧な形と無機質な印象はどこか美しさすら感じさせる。

いや、これは美しいというよりも……。

(すごい綺麗、だよな……)

そんなことを考えつつ、服を完全に剥ぎ取れば。乳房と同じくむき出しの女性器ユニットが現れる。

だが、それ以上に涼を惑わせたのは股間から放たれる僅かな臭気と毛のない割れ目から染み出る粘液。

そちらは彼にも見覚えのある臭気、男性精液に違いなかった。

その外見から予想はしていたことだが彼女は娼婦を生業とするアンドロイド、そして仕事のに何かのトラブルで機能停止して路地に転がっていた

ということなのだろう。

警察を呼ばれたくない理由もおそらく後ろ暗いことがあるからだと考え
ほうが妥当か。

「どうしようか……今からでもあそこに戻すか……警察呼ぶか……」

いや、移動中にそれこそ警官に見られたら厄介どころの話ではない。

警察を呼ぶにしても、自宅に連れ込んだ説明をして納得してもらえ
とは思えない。

はあ、とため息を付くと涼はヘソに指を差し込み、強く押し込んでいく。
ヘソの奥に仕込まれたスイッチがかちり、と音を立てれば。

滑らかな腹部が割れ、涼の指を中心にするかのように左右に開いていく。

機器が放つ樹脂の匂いと、先程よりも強い精液の臭気が混じって部屋に
放たれる。

腹部中央に覗くパイプのような部品、男性器を受け入れるためのだけの
機構。女性器ユニット本体が紛れもなく彼女がセクサロイドであることを
示していた。

職業上の知識として、女性器ユニットのカatalogを見たこともあるが実
物と写真では話が違う。

しかも、今日の前にあるそれほどこの誰かもしらぬ男の臭気を放つ使用
後のもの。

他人の生活を覗き見た罪悪感と、機構部品が醸し出す淫靡な雰囲気、なぜ
自分がこんなことをとという理不尽さ。

それらを押し殺して涼は、開いた腰部分に埋め込まれた電源ユニットを
交換する。

女性器ユニットに比べれば単なる無骨な機器にしか見えないユニットに
接続された太いケーブルを力を込めて外し、新品のユニットに接続し直す。
「よし、できた……それじゃ、起動を……」

ふう、と一息ついた後、接続されたままのタブレットの電源アイコンを
タップする。

「あ！ しまった……このままだと……！」

「彼女」は未だ裸で、なおかつ後頭部と腹部のハッチを開いたまま。

修理後の再起動を、機器の状態を確認するため各部ハッチ開放状態で
行うのは通常の機器ならおかしいことではない。

だが。人格付与型のアンドロイドに対して行って良い行為だろうか。

そう思ったときにはすでに遅く、起動シーケンスは開始してしまった。

今から無理やり電源を落とすわけにも行かず、あたふたとしながら涼は

「彼女」を見守るしか無い。

『ぴ、きゅ。業務用アンドロイド、リリース T2 シリーズ KFA-A51WS：登録番号：FA512 = SW2531。人格エミュレートモードで起動を行います……起動準備中……』

小さくつぶやく彼女は、今度はエラーメッセージのひとつも発せずゆっくりと眼を開けていく。

固唾を飲む涼にその顔がゆっくりと向けられれば。

「あ、あれ……な、これ……ぎゃあああっ！？ なにしてくれてんのおおっ！？ あんた誰ええっ！？」

深夜に響き渡る悲鳴。

慌てて涼はアンドロイドの口をふさいで床へと押し付けた。

「もう、謝ってるじゃん……ごめん、ってば」

見事に掌の形の跡を頬へはり付けた涼と、彼に向けて頭を下げるアンドロイド。

服を羽織り直し、各部のハッチも閉じればその姿は人間と変わらない。

凍りついていた表情もくるくると変わり、生气すら感じさせるほど。

押し黙りながらも内心、涼はその姿に見とれていた。

「だって……そりゃ驚くでしょ！ 起動したと思ったら素っ裸であちこち開かれて……。だから、わかってるってば。貴方が助けてくれたのは。だからこうして謝ってんでしょ！」

もう一度頭を下げたアンドロイドは、にかっと笑い立ち上がって涼を見下ろす。

「んじゃ許してくれる？ 許すよね？ おっけー？ あたしは唯那 = FA512 = SW2531。まあわかってると思うけど……アンドロイドでお仕事は男のお相手」

「FA512……名字なしで登録番号？ それって」

「そ。所有者成しの自立生活アンドロイド。だから、ま。それなりにお金も必要なのよ。……税金みたいに自分の身体の代金払わなきゃいけないんだから」

しばらく前から一定数のアンドロイドが政府によって生産され、彼女たちは一般人と同じく各種の業務につきながら生活をしている。

涼が予想していたことではあったが、彼女は娼婦。セックスワーカーと呼ばれる職業のアンドロイドだった。

「いやあ、こういう仕事だとちょっと問題のあるお客も多いの。で、今日の



客がまあ……乱暴というかナイフ突きつけて。ロボットなんだから大丈夫だろ！とか抜かして刺しながらのプレイしようとするのよ。そりゃちょっとくらいなら人間と違って死にゃしないけど。だからってそんなの、我慢できると思う？」

まるで涼がその客であるかのように怒り心頭の顔を向けてくる。

その顔に動揺しながら隠すように目線をそらす涼に構わず、唯那は弾丸のように言葉を浴びせ続ける。

「できないよね？ だからさ、そいつに突っ込まれたときに……『安全装置』起動したのよ。女性器ユニット内蔵スタンガン。いやあ、使ったの初めてだったんだけど……すごい効果」

にやり、と小悪魔のような顔を浮かべる唯那。

おそらくは微小の威力のものであろうが、女性器ユニットに内蔵されたとあれば当然相手は。

涼が身震いするのを見やってから、唯那は片足を持ち上げて。

「んであいつが気絶したとこで逃げ出したわけだけど。負荷がかかったみたいで電源ユニット、壊れちゃって。あとはまあ……そういう感じ。いや、私が悪いんじゃないけど！ やっぱ警察相手だとすごい面倒だし。ましてや……人間傷つけた、だとね」

どか、と体重をかけてベッドに腰掛けてもう一度涼の顔をまじまじとみる。

「しかしまあ……随分と可愛らしい顔してんのね貴方。ちょっとびっくりしたわ。あ、そいうや名前は」

「く、久保 涼……。なんだよ、急にそんなこと」

「涼、か。いや……まあ。ほらさ。新品の電源ユニットももらっちゃったし。お礼、ってやつ？」

もう一度足を上げた唯那はまだ粘液がついたままの割れ目を指し示して扇状的な笑みを浮かべる。

「あ、もちろんちゃんと洗浄するから安心して。ちょっとお風呂借りたいけどいい？」

「い、いや！ そういうの、いいから！」

「えー。お風呂くらい貸してよ。ケチ」

「そういう意味じゃ、なくてさ！」

腕で顔を覆いながら涼は唯那の言葉を全力で拒否する。

そんな涼の姿を見やってから、唯那は肩をすくめてベッドから立ち上がった。

「……ま、いいわ。お礼の件は後で考えとくから」

「だから……お礼なんていいから……」

顔を覆ったままぼそぼそとつぶやく涼に怪訝そうな顔を向ける。

「じゃ、お風呂だけ借りるね。ともかく女性器ユニットだけでも洗浄しちやいたいのよ。いいでしょ？ いいよね！」

勝手な言葉を言い放ち、唯那はバスルームの方へと消えていく。

その背中が視界から消えればどっと疲れが押し寄せてくる。

考えてみれば唯那をここまで運んだだけでも鈍った身体はへばる寸前だ。

唯那の尻で少し凹んだベッドに腰を下ろせば睡魔が押し寄せる。

眠気に抗う術を失った涼がそのまま横たわれれば、まるで電源が落ちたア
ンドロイドのごとく意識が消えていった。

涼の目が冷めたのはその日の昼過ぎ。

ベッドの上でぼんやりとした意識で首を回す。

確か、崩れ落ちるように眠りに落ちた記憶があるが妙に整った姿勢できちんと毛布もかけている。

確か壊れたアンドロイドの女性を拾って。修理して。

「夢……？ いや……」

上半身を起こせば壊れた電源ユニットが目に入る。

だとすれば。

「唯那……さん？」

呼びかけた声に返事はない。

バスルームを覗いてみれば確かに自分以外が使った形跡と整頓した跡がある。

考えてみればベッドに崩れ落ちたはずだったのを直してくれたのも彼女なのだろう。

だが。

玄関に揃えていたハイヒールも姿を消している。

「やっぱり……夢、だったのかな……」

そうでないことはわかっていながら小さくつぶやく。

ため息をつきながら部屋に戻り、冷蔵庫から食パンを取り出してトースターに突っ込み遅めの朝食を準備する。

テレビをつければ朝のニュース番組が流れ、いつもと変わらぬ風景が画面の中に映し出されている。

ワイドショーは芸能人の離婚と、政治家の献金疑惑の話題。

この半年で世の中は変わったようにも変わらないようにも見えた。
そんなことを考えているうちに食パンが焼き上がり、適当にバターを塗りくわえてから頬張る。

ぼんやりとした頭を覚ますためにコーヒーをカップに注げば一気に飲み干す。

ふう、と一息ついて気を取り直す。

一夜の夢、そう思ったほうがやはりよいのだろう。

下手に関わってトラブルに巻き込まれても困る。

そう思い直した涼は日常に戻るべく怠惰な休日を過ごしていく。

日課のゲームと配信期限ぎりぎりの映画消化。

先週と変わらぬ休日を過ごすもどこか見の入らぬ時間。

気がつけばとっぷりと夜が暮れ。

遅くなったがファミレスにでも出かけるかと思ったその時。

「たっだいまー♪」

バルもならず玄関が開く音に続いて陽気な台詞。

慌てて首を向けた部屋の扉からひょこ、とピンク色の頭髮が覗く。

「いやあ、まいっちゃったまいっちゃった」

予想通りの人物に一瞬涼の動きが止まる。

「なに？ そんなびっくりした顔して」

涼の顔を覗き込んだ唯那はこころと笑い出す。

「……いや、その。てっきり出てったかと」

「なによ。あたしはそんな薄情なロボットじゃないわよ。よく考えたら人造愛液もエンプティぎりぎりだったし。ちょっと家に戻って準備してただけだって」

「準備、って……ま、まだその……」

「うん。ちゃんと礼はしてあげるって♪ あのさ、あたし人間の興奮時の反応はちゃんとかかるから。あたしの裸見た時、きっちり涼のアソコ反応してたよ？ きっちり洗浄も消毒もバッチリ済ませてきたから安心安全♪」

ぐ、ぬ、と言葉を飲み込む涼に勝利の笑みを浮かべれば。

「我慢しなさんなって。」

にへら、と満足げな笑みで唯那は涼に指を突きつけた。

ベッドの上、こわばった表情の涼に寄り添いながら唯那はにまにまと笑みを浮かべている。

「何がそんなに不満なのさー。初めてはやっぱ人間の女のほうがよかつ

た？」

「い、いや、そういうわけじゃなくて……ちょ、初めてって……そうだけ
ど……」

「いいからいいから。おねーさんに任せなさいって」

唯那の言葉に涼はもう一度ため息をつくとき窓の外へと視線を転じる。

唯那に押し切られる形でなし崩し的にこんな事になってしまった。

いや、本当はわかっていた。

彼女を連れ込んだ時点で下心が皆無だったわけではない。

それに自分は。

その心境を見透かしたかのように笑う唯那は惜しげもなく服を脱ぎ捨て
裸体をさらす。

昨夜、さんざん眺めた身体ではあるが機能停止状態と稼働状態では意味
合いも変わってくる。

「じゃ、始めようか♪」

そう唯那はささやくと身体を絡めてくる。

首筋から鎖骨へ。そして巨大な双丘が腕へと押し付けられる。

だが興奮に身体の芯を熱くする涼の耳元に唇を近づけると、唯那は小さ
く一言だけ付け加える。

「ん、もう勃ってるじゃん。身体は素直、ってやつ？」

唯那はズボンの上からゆっくりと涼の股間を撫で回すと満足げに頷いて
身を離す。

「そ、そんなんじゃない……って……」

言い返そうとする涼に唯那はクスクスと笑い声を上げる。

「はいはい、んじゃとっとそっちも脱ぎなさいな。それとも、あたしにひ
んむかれない？」

サディスティックな笑みに涼は身を震わせ、諦めたようにズボンを、下着
を下ろしていく。

その下から現れたペニス。それをまじまじと唯那は見つめる。

「……そんな、見ないでよ。悪かったね、貧相で」

そこまで卑下するほどではないが標準よりは控えめなサイズ。

「いやいや！ 大丈夫大丈夫！ あたしを何だと思ってんの？ セクサロイ
ドだぞー。男をイカせる為に作られてんだから。黙ってまかせなさい」

目を輝かせたまま涼の上にまたがると膝立ちになりペニスへと手を添え
て。

「ま、ちょっと挨拶がてらね」

そう言うと唯那はくにくにと竿をいじり始める。

「あ……ちょ、ちょっと」

「なによ、敏感なのね。いいじゃん。こういうのも反応がわかりやすくて面白いわ」

しばらく手の中で弄んだ後、完全に勃起したペニスを満足気に見下ろすと唯那はすでに湿っている股間をゆっくりと先端近づけていく。

「え、ちょ、いきなり……！」

「こういうのはね。一発出しちゃったほうがいいんだってば。じゃ、いくよ……」

「ま、まって。唯那、さ……あうあああっ!？」

ちゅば、と音を立ててシリコンの肉をペニスがかき分ける。

外見こそ人間のそれと変わらないものだが、女性器ユニット内部は幾何学的なラインで構成されているのが先端から伝わってくる。

「おっ……ん。ふぁ……♡」

先端を飲み込んだ唯那は小さな喘ぎを上げつつそのまま腰を下ろせば、ずぶずぶとペニスは肉穴に飲み込まれていき、すっぽりと根本まで包み込まれる。

「あはっ、全部入ったぁ……♪ どう？」

完全に根本までくわえ込んだまま唯那が嬉しそうに笑うが、涼のほうは絡みつくシリコンの感触に高まる欲望を吐き出す寸前にまで達していた。

「あ……う、うごかない、で……ゆ、な、さ……」

女性器ユニットから伝達される快楽信号は、普段のプレイに比べれば小さいものだったが。

それを正直に言うほど唯那は無慈悲ではない。

表情を制御し、上記した顔を形作ると小さく、しかし満足げに頷く。

「ん、だーめ。とりあえず、セクサロイドの女性器ユニット、あじわっちゃえ♡」

わずかに腰を浮かせた唯那は上下にゆっくりとグラインドさせるように動き始める。

「あ……ん♡ あふっ♡ あはっ♡」

ぬぷぬぷと肉穴の壁面がペニスを擦り上げればその感触に涼は声を押し殺すことが出来ない。

それだけでも絶頂寸前。

だが。

唯那が目を閉じれば、ういひい、という動作音と共に内部が振動を始め

る。

人間のものではありません、完全に搾精のためだけの非人間的な動作。

「う、あ、あ……な、こ、こんなの……あああああー……っ！！」

「ど、う、かなっ♡ ぴ、きゅっ♡ 女性器ユニットモード設定 004、正常動作……んっ♡ んっ♡ びゅ、きゅいっ！」

唯那に設定されている動作パターンの中でも出力最大、通常の性交には想定されない振動が涼のペニスを揺さぶる。

「あ♡ ん、ぴ、がぴっ♡ あはっ、出しちゃえ……♪ びゅっびゅしちゃえっ♡」

絶頂寸前のペニスは内部の激しい振動に即反応するが、このモードでは唯那にも相応の快樂信号が流れ込み、言語処理領域が不足し、嬌声にノイズが混じり始め表情も僅かに制御を失って引きつっていく。

その機械的な唯那の姿を股の下から見上げた涼のペニスが最大限に硬直し。

次の瞬間、唯那の子宮ユニットに大量の白濁液が吐き出された。

「びゅ、あ……♡ ん……♡ 最後はちょっと良かったぞ♡ どうする、まだする？ したいよね？ できるよね？ 涼♪」

軽く絶頂に達した余韻を味わいながら、息も絶え絶えといった様子の涼へ繋がったまま囁きかけるセクサロイド。

しかし。数秒後にびくん、その背筋が痙攣して。

一瞬、機能停止時のような生気のない表情を浮かべると同時に腹部からばち、ばちと異音が響き始める。

「あ、あれ……びぎゅがっ！？ じょ、女性器ユニットの接続が異常で、制御回路 RG12A を確認してくだ、さ……あひあがああっ！？ お、ほ、あああっ♡ な、なに……ひぎいいいっ！？」

システムメッセージを呟いた後、続けて唯那の口から悲鳴が漏れる。

「ひ、ががっ……びゅ♡ か、はああ♡ お、お腹、じょせいきゅにっとの接続部が、しょーと、して……あひいいいっ！？？」

引きつった笑みを浮かべながら悲鳴を上げ続ける唯那の女性器ユニットが再び振動と締付けを開始する。

「ゆ、唯那、さ……んあああっ！ と、とめてっ……！」

「だ、だめ。せいぎょ、できな、がぴいっ！？ な、なんか安全装置使ったときに負荷かかったのが、ど、動作パターン激しいの使ってこわれちゃったみた、い……ぎゃびいいいっ！ りよ、りょうっ！ しゅ、修理、しゅうり、してえ！ このままじゃあたしこわれちゃ……がびいいいっ！！」

「しゅ、修理っていわれてもっ……！」

ノイズ混じりの嬌声に痙攣する肢体。

先程までの淫靡さはなりを潜め、壊れかけのロボットそのもの姿をさらす唯那。

その姿を見れば何故か涼のペニスは再びいきり立ち始めて。

「びぎゃあああっ！？ りょ。ryo、うっ！？ お、おっきくなって、あ、ひぎ！？ か、快樂信号、がああっ♡ だめえっ♡ はやく、なおしてえええっ♡」

自分の上に跨りながら痙攣を続ける唯那のヘソに手を伸ばし、涼は腹部ハッチをなんとか開くが。

腹部が割れたその中から青白い火花が連続して弾け飛ぶ。

その中央部に収まる筒状の部品からは明らかに異常をきたしている動作音が漏れ、周辺の回路は赤い点滅を繰り返している。

おそらく、女性器ユニットに接続されているケーブルが何か破損しているのだろうがとても手を差し込める状態ではない。

「ゆ、ゆなさんっ！ 電源、おとさないっ！ 自分でシャットダウンできるっ！？」

「みゃあああっ♡ き、きもひ、いっ！？ びぎゅがっ！？ い、イクうううっ♡ 絶頂しまぜ、ぜっちょう、ししし絶頂、がびいいいいっ♡ ひみゃああああっ♡」

必死に呼びかけるが、思考領域が狂った信号の快樂を味わうことのみ支配された性交機械は呆けた顔を晒したまま、喘ぎ声を上げ続けるのみ。

逃さない、とばかりに締め付ける女性器ユニットからペニスを抜くことも叶わない。

唯那を手動シャットダウンさせるには後頭部ハッチ内部のスイッチ操作か、ケーブルで接続したタブレットからの操作が必要だが、この体制ではどちらもかなわない。

「ゆ、唯那、さ……あ、そ、そうだ……！」

頭がおかしくなりそうな快樂の中、涼は昨夜読み込んだ彼女のマニュアルの記憶を手繰り寄せば。

この状態でもまだ操作ができそうな位置のメンテナンスハッチが左乳房部分にあったことを思い出す。

唯那の上下動にあわせてぶるん、ぶるんと派手に揺れる双丘、その片側を鷲掴みにする。

すでに尖ってピンと固くなっている桜色の特記をつまみ、ひねって押し

込めば。

「ぴ、きゅ、あああっ♡ めめ、meんてなnスはっちおーpupu ぶんんししがびいいいっ♡」

狂ったシステムメッセージを発しながら、唯那の左乳房が外側に開く。

マニュアル通りならこの部分に装着されているのは快楽中枢回路。

唯那の性的機能を司る部品。

「唯那さん、ごめんっ！」

涼は迷わずむき出しの快楽中枢回路の上に並んだスイッチを押し込み、続いて右乳首を右いっぱい回転させ、さらに押し込めば。

「ぴ、ぎゅ、がびいいい♡ 動作モードを変更し、しし……ぴぎゃあああーっ!? セセ性感帯感度設定が変更ささされ性交中の設定変更は重大な故障の原因ににに感度上昇じょじょ上昇性感帯ぶーすとが開始ささされれれぎゃびいいいいーっ!? ひぎいいいいーっ♡ きききもちいいきもちいいきもちいいでででびゅいんびゅいんがびーっ!? ゼ、絶頂、絶頂、ぜぜぜっちょちょちょあぎゃぎゃぎゃぎゃがびいいいいーっ!?」

すでに壊れた回路からの快楽信号で異常を来している唯那の電子頭脳。

その感度が一気に引き上げられれば。

快楽中枢回路がばちりばちりと火花を弾けさせ、口から舌を突き出しながら絶叫を上げる。

今までに味わったことのない強度の信号に唯那の電子頭脳の処理領域はあっという間に食い尽くされて。

制御を失った女性器ユニットの動作に耐えきれず、涼も絶叫とともに二度目の射精を唯那の膣奥で放つ。

内部で白濁液を受け止めた女性器ユニットが、唯那の腹部ハッチの中で激しく振動を重ねて。

同時に一瞬、青白い火花が腹部機の中でひときわ激しく弾けていく。

「びゅ、ぎ、あがががP=@P!#”() がががびがびぎゅあああーっ!?」

壊れたスピーカーそのもののノイズを発しながら、絶頂に達して激しく痙攣する唯那、その両目も制御を失い互い違いにの位置で停止したままがくり、と首が横倒しになり。

やがてどこかの回路が完全に焼き切れたのか、ぼしゅー、と空気が抜けるようにして全身の力が抜けていき。

唯那の機能は完全に停止した。

「いやぁ……あはは。ほんっと、ありがと。いやぁ、壊れるかと思ったわ。面目ない」

「思った、じゃなくて壊れたでしょ……」

その日の深夜、有り合わせの部品で修理されてなんとか再起動した唯那が照れくさそうに頭を下げる。

「ごめんねえ、涼。ホントにお礼のつもりだったんだよ？ ……それはそれとして。いやぁ、やっぱロボットって壊れるのね……。いままで機能停止まですたことなかったけど、まさか2回も、ねえ」

まだ唯那は修理された時の裸体のまま。

その状態で上目遣いに涼へと体を寄せてくる。

「……何が言いたい、唯那さん」

「あのさ、涼。しばらくあたし、ここに住もうと思うんだけどいいかな？ いいよね？」

「だ、だめに決まってるでしょ！ 狭いんだから！」

唯那の突然の提案を涼は即刻却下する。

そんな涼の言葉に不満げな唇をとがらせながら、唯那は言葉を続ける。

「いいじゃん、物置部屋になってるあそこでもいいからさ。職業柄着替はちょっと量あるけど、あとは整備機器類だけあればおっけーだし。一応、料理くらいは少しできるよ？ 食事機能ないからレシピ通りのやつだけど。あと家賃は半額折半、あとはあたしの整備してくれれば好きなときにセックスしたげる。あ、夜は半分くらいはいないと思って。お仕事あるから。いや、こんな好条件そうそうないよね？ はい決まり！」

「勝手に決めないでください！ だめだってば！」

「いーじゃん、ねえ！ それに……。ログ確認してわかつちゃった。涼、あたしが誤動作したりメンテハッチ開いたりするたび、勃起すっごくなくなってんだけど」

言葉を失い硬直する涼に、悪魔のような笑みを浮かべれば。

唯那は耳元に口を寄せて囁く。

「ロボフェチ」

その言葉に涼は敗北を悟る。

ロボット技術者になったのも、彼が指摘の通りの性癖持ちだったからだ。

倒れている唯那を見たときの下心もすべてそう。

「やっぱそうかぁ。うん、あたしは気にしないからね。むしろ嬉しいっていうか？ でも世間一般的にはどうだろ？ それなりにロボと人間のカップルも認められつつあるけど、そこに興奮するのバレちゃうといろいろどう

かなあ、って……あ、別に職場にいたりとかしないよ？ でもさ……んふっ」

その囁きに再度硬直した涼の耳に軽く息を吹きかけて、唯那は笑う。

「ま、そういうわけだからしばらく厄介になるね。いつまでかはわかんないけど……よろしく、ね♪」

朗らかに笑うセクサロイドに、涼は完全敗北を悟り。

その日からアンドロイドと青年の奇妙な同棲生活が始まった。